

二〇一四年六月二七日 開催

《『留学生と語る』オープンデイスカッション》

わたしの多言語環境——オーストラリア、スペイン、インドネシア

サウクエン・ファン

(執筆||ミラー成三)

■ 話題提供者……Lisa Abi (インドネシア・アトマジヤヤ大学)、Carolina Cornejo Godoy (スペイン・バ

ルセロナ自治大学)、Kimberly Whiting (オーストラリア・クイーンズランド工科大学)

■ コーディネーター……サウクエン・ファン

第一回のオープンデイスカッションではインドネシア、スペイン、オーストラリアからの交換留学生を迎え、それぞれの国の多言語環境について話題提供をもらった。その後それぞれの国の多言語状況に関してデイスカッションが行われた。今回の話題提供を行った留学生たちの出身地であるインドネシア、スペイン、オーストラリアは様々な言語や方言が話される多言語国家であり、デイスカッションにおいても言語や方言に関することが多く話された。なお、オーストラ

リアの話題提供者は当日欠席であったため、後日別個にデイスカッションを行っている。

まず、言語と方言の関係性について、すなわち二つは同じ言葉の違うバリエーションなのか、それとも違う言葉なのか話し合われた。「インドネシアではそれぞれの言語は違う文字を使用するため、違う言語だと思う」という意見が挙げられた。また、スペインにおいては「方言も違う言語として捉えられている場合が」あり、「例えばスペイン語とカタルーニャ語は違う言語であると思われる」という意見が挙げられるなど、近年は同じアルファベットを使用するが全く異なる言語も多数あることが指摘された。日本における言語と方言に関しては、「色々な地域で○○弁と呼ばれているように、方言なのではないか」という意見が挙げられる一方で、沖縄に住む人は自分たちの言葉を「琉球語と呼んでいる」ことが

指摘され、言語と方言が同じ言葉の違うバリエーションなのか違う言葉なのかは、言語学的な定義よりもその言葉を使用するそれぞれの人々の意識が大きく関わっているのではないかという意見が挙げられた。

次に、言語と地理の関わりについての指摘がされた。例として中国の福建省での多言語状況が挙げられ、「北京周辺の中国語と福建省周辺での中国語はもちろん、福建省内においても南北で、さらには隣町同士でも言葉が通じない場合がある」ことが挙げられ、「方言の方言」の存在が話された。また日本の福島においても同様に、「浜通り、中通り、そして会津地方で話される言葉に違いがあり、同じ福島弁でもお互いに通じない場合がある」ことや、「以前はどこでも、峠を一つ越えるだけで言葉が通じなくなる状況があった」ことも挙げられた。スペインにおいてもカタルーニャ地方におけるカタルーニャ語やバスク地方におけるバスク語の存在が挙げられ、地形による隔たりと言語には大きな関わりがあることが指摘された。続いて言語とアイデンティティの関わりについて様々な意見が挙げられた。まず、「東京弁が標準語となっているのとはとも気になる」という話題から、「関西では関西弁が標準的に話されている。言語は自分の出身や自分のアイデンティティを示すものなのでそれを標準語によって隠すのはおかしい」という意見が挙げられた。スペインにおいてもこれは同様で、

留学生もカタルーニャ地方の独立運動を例に挙げながら、「やはりカタルーニャ語は自分にとつてとても大事である」と同調していた。またその他の日本の地方においてもこれは同様であり、その地方の言葉を話すことによってグループとしての意識を共有することが行われていることが話された。これは後日開催されたオーストラリアからの留学生とのディスカッションにおいても指摘されていた。「オーストラリアでは、アジア系オーストラリア人が白人系オーストラリア人甚至比英語能力が低く、また多言語を使用する機会が多いため自分たちをオーストラリア人として見るのが難しい」状況であるという。このダブルナショナルリティ、あるいはアイデンティティの問題は特にこれから向き合っていくべき問題として受け止められていた。

最後にまとめとこれからの多言語環境を考えていく上での課題として、多言語使用者は様々な言語という形の選択肢を持つているのだということが指摘された。その選択を誤ってしまうと多くの問題が起きてしまう可能性があるため、「自分のどのような面をどのような場面で示すのか、またその時の自分はどのような自分なのかを考えるべきである」という意見が挙げられていた。



話題提供者の留学生



会場風景